

氏 名(国 籍)	劉 <sup>りゅう</sup> 梅 <sup>めい</sup> 琴 <sup>きん</sup> (中 国)
学 位 の 種 類	博 士 (芸 術 学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 1,431 号
学位授与年月日	平 成 7 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	芸 術 学 研 究 科
学 位 論 文 題 目	沈周の絵画とその芸術思想

主 査	筑波大学教授	芸術学博士	真 保 亨
副 査	筑波大学教授		角 井 博
副 査	筑波大学教授	文学博士	相 馬 隆
副 査	筑波大学教授		西 野 元

## 論 文 の 要 旨

本論文は、中国明代の文人沈周の絵画とその藝術思想について論じたもので、特にその画業を著者独自の考えによって前期・中期・晩期に分け、中期と晩期の転換となった名作「夜坐図」を中心に沈周の絵画の特質ならびに藝術思想を詳しく究明し、中国絵画史就中沈周と明代文人画の意義付けに論及している。

全体を六章に分けて、第一章序論、第二章沈周と明代絵画、第三章沈周の生涯と絵画の淵源について、第四章沈周の画業について、第五章沈周絵画の特質、と題して論述し、第六章の結論へ導き、本論文を構成している。

先ず第一章の序論では、三節にわけて、第一節で沈周絵画を研究する動機と目的、第二節で沈周絵画に関する研究資料、第三節で沈周絵画を研究する方法や問題について述べている。すなわち、中国絵画史上沈周の絵画が高く評価されているにもかかわらず、その研究が進んでいないこと、殊に生涯における画業の分期と代表作「夜坐図」についての創作理念が根本的に誤っていることをあげて、これらの問題点を正し、沈周研究に役立てたいという論文の目的を明確に述べている。

第二章の沈周と明代絵画では、第一節で明代絵画の思想理念について分析し、模古主義の台頭、浪漫主義のあけぼの、個人主義の出現と時代を追って詳しく論じた上で、その過程として模古主義の流れの中に写意説が盛行したことを述べている。第二節では明代画派を浙派と呉門画派並びに院派に分けてその展開を記し、明代における沈周絵画の位置を明らかにしている。

第三章沈周の生涯と絵画の淵源では、第一節で沈周の出身・家柄、生い立ち・人格風貌について述

べ、第二節で絵画の学習過程として、初め父恒吉に習い、後沈家の師であった杜瓊の影響を受けたことを、文献を駆使して明らかにする。第三節では画風の形成について述べている。ここで沈周の細筆・粗筆二通りの画風に関し、細筆は王蒙を中心とする模写によって習得したこと、粗筆は四十歳から黄公望や呉鎮に傾倒しつつ、やがて沈家と劉珏との交流によって始まった劉珏の影響が、沈周の画風の形成に多大であったことを力説している。

第四章は沈周の画業全般について説いたもので、代表作の作品論に及んでいる。第一節で、著者は歴代著録からその膨大な画蹟を洗い出し、そこから現存作品で真蹟のうちより重要な代表作を選び、先行研究と異なる著者独自の分期、すなわち、生涯を三分し、前期は宣德二年（一四二七）から成化六年（一四七〇）四十四歳までの修業期、中期は同年から弘治五年（一四九二）六十六歳までの確立期、晩期は同年から正徳四年（一五〇九）没する八十三歳までの円熟期を決めている。第二節以降は作品論であり、第二節では、前期の作品から、「支硎山図」・「幽居図」・「採菱図」・「廬山高図」・「魏園雅集図」、第三節では中期の作品から、「贈劉珏山水画冊」・「崇山修竹図」・「倣董巨山水図」・「画山水」・「東莊図冊」・「雨意図」、第四節では晩期の作品から、「夜坐図」・「莊生夢蝶」・「写生冊」をそれぞれの時期を代表するものとして取り上げ、その描写・画風・題賛・意義等について、詳細に記述し且つ論じている。

第五章は、沈周絵画の特質について述べている。先ず第一節で、画中にみる隠逸思想を分析し、伝統的文人の隠逸思想を論じ、沈周における隠逸の特質及びその隠逸の画風を解明し、彼の藝術理念の説明に及んでいる。第二節では、仁により藝に遊ぶという儒家の藝術精神を取り上げて、一般の中国文人の藝に遊ぶ精神を概観し、さらに沈周自身の藝に遊ぶという特質を掘り下げて考察している。第三節では、特に本論文の骨子になる作品「夜坐図」をめぐる、詩画という藝術表現の形式と内容に触れ、従来の学者が「夜坐図」を仏教の影響としたことに対し、著者は道教の影響を重視し、情を詩文に託する道家の山水精神を表すものとして、「夜坐記」の文章構造、修辭法を細かく分析して、その思想内容を明らかにし、絵に託した道家の山水精神として、「夜坐図」における伝統的の道家山水絵画の風格について探究し、本図の絵画藝術表現の形式、構図、内容等につき詳細に解明を行っている。第四節では、人格及び自然美と藝術美との結合を主題に、詩人の情と画人の藝、人文性情、藝術理念の美にわけて説いている。

第六章は結論として、第一節で沈周の藝術観と儒教・仏教・道教のいわゆる三教一致の思想にふれて、沈周の儒釈道の信念から、晩年には道家の思想に浸潤し、自然と生命の表現を目指した藝術観にいたったことを述べている。第二節では、沈周の藝術に対する評価とその後世に与えた影響について述べ、特に「夜坐図」における時間空間の表現を評価すべきものとして、その絵画史上における意義を論じている。また、山水画とならんで沈周の花鳥画についてもその画格の高さを説いている。

巻末に付録として、宣德二年（一四二七）の誕生から、正徳四年（一五〇九）没する八十三歳にいたる沈周の年譜、図版目録、参考文献（中文・日文・欧文）を付している。また、図版八十図は別冊で掲げている。

## 審 査 の 要 旨

本論文は、沈周という明代文人画家についての作家論である。しかし、一般に行われている伝記と作品論を中心とした単なる画業の展望と位置づけにとどまらず、これらの上に立ち更に沈周という画家の芸術に対する思想内容を深く究明した方法論的にも独自性の高い論文といえる。

前半は、明代絵画一般に対する考察から始まって、生涯の画業の展開を三期に分け、その転機に立つ作品として贈劉珏山水画冊、夜坐図（共に台北故宫博物館蔵）をあげているが、これは決して皮相なものではなく、作品についての充分な観察と裏付けによって行われたことは、画風の分析もさることながら、その周到な沈周の詩文に関する解釈によって窺われる。作品の分期とともに、論文の骨子をなすものは、沈周画の特質である。これについては、特に夜坐図をあげて画中に記された夜坐記の徹底的な解析によって、沈周画の特質を闡明している。そこに、従来考えられなかった道家の思想の影響を初めて指摘したことは、沈周画ひいては中国文人画の解釈に一石を投じるものとして注目されよう。論文の構成もよどみなく、著者のいわんとした目的は一応達せられているが、文章中にままたま慣用されていない漢語が用いられるなど、表現にも一部晦渋なところがみられる。しかし、外国人の文章としては、水準を上回るものであり、これらの問題点は今後の精進によって解決されるであろう。いずれにせよ、本論文は鋭い洞察力と新鮮な方法によって中国絵画研究に独自の道を拓いたものとして、高く評価すべきであろう。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。